

ワンツーワークス公演

死に顔ピース

作・演出 古城十忍

「人はどのように人生の最期を迎えるのが幸せなのか」
その一つの答えが、この舞台にはあります。

●お問い合わせ

(株)オフィスワン・ツー／劇団ワンツーワークス
166-0004 杉並区阿佐谷南 1-8-3 佐保会東京会館 101 号
Tel 03-5929-9130 Fax 03-5929-9131
担当／藤川けい子 080-5021-5362

www.onetwo-works.jp

■企画意図

人はどのように人生の最期を迎えるのが幸せなのか

古城十忍(劇作家・演出家)

ロビン・ウィリアムス主演の映画『パッチ・アダムス』(1999 年、アメリカ、監督:トム・シヤドヤック)をご覧になったことがありますか？

病院で長時間待たされた挙げ句に、診察はわずか3分。重度の病気でもシステム化されているがゆえに非人間的な治療がまかり通る。こうした医療の現状に大きな疑問を抱いた青年医師が、何よりも「笑いによる治癒力向上」を信条とし、笑いのある医療を目指して、規則だらけの病院の中で「理想の医療」を目指し、次々と問題を起こしながらも孤軍奮闘する――。

この映画の主人公「パッチ・アダムス」は実在のモデルがいます。本名はハンター・アダムス。「愛とユーモア」を根底に置き、人にやさしい医療を目指した彼は、やがて無料で医療サービスの受けられる病院「ゲズントハイト・インスティテュート」(お達者で病院)を設立します。プロの道化師であり俳優でもあったハンター・アダムスの「何よりも患者を喜ばせること」を医療の根底に置く考え方は、医学界から冷ややかな目で見られる一方で、「理想の医療の実現」に心を砕くたくさんの支持者を集めていくことになります。

2004 年に山口県大島郡周防大島町で「おげんきクリニック」を開業した岡原仁志院長も、パッチ・アダムスと出会ったことで医療に対する考え方が大きく変わった医師の一人です。

岡原先生もまた、末期の癌患者を数多く抱えながら、「思いやりの医療」を追求し、これまでにない医療の在り方を実践しています。それはややもすると、世間から奇異な視線を浴びそうなことばかり。例えば、いろんなコスプレをして往診に行く。在宅医療の家庭でミニコンサートを開く。患者と直接メールのやりとりをする。患者やその家族と「ハグ(Hug)」を繰り返す……。

本作『死に顔ピース』は、岡原仁志さんの経験をモデルとして、現代医療の在り方に疑問を投げかけ、終末医療の在り方を見つめ直す、古城十忍書き下ろしの舞台です。

「人はどのように人生の最期を迎えるのが幸せなのか」

その一つの答えがこの舞台にはあります。

■ あらすじ

癌の最先端治療が行われる大学病院。

医師・渡良瀬益三は、多くの癌患者の治療に忙しい日々を送っている。そんな中、ダジャレばかり言っていたある患者の死をきっかけに、1分1秒でも延命させるという自分の治療のあり方が揺らぎはじめる。



2 児の母で専業主婦の末永楠美は、離婚をきっかけに看護師の資格を取り、新しい人生を歩み出していたが、重度の進行癌が見つかり入院。最先端の癌治療を受けながらも、死への恐怖はぬぐえず、何本もの管でつながれ病室に縛り付けられることに耐えられない。末期の肺癌で余命はもう長くないことを知った楠美は「家に帰りたい」と訴える。

い」と訴える。

在宅看護を決意した楠美の父と母が出会ったのは、大学病院をやめ、「医療に笑いとユーモアを」という姿勢で在宅緩和医療に取り組んでいる渡良瀬だった。



訪問看護の初日、渡良瀬はピンクのナース服姿で、着ぐるみを着た看護師・桐野とともにやってきた。驚く楠美をよそに、末永家の家族たちにかぶり物をかぶせ、全員で記念写真を撮る。「今日から友達になりましょう」という渡良瀬に、楠美は笑みを浮かべ頷く。

渡良瀬と桐野は往診のたびに新しいかぶりものをもってやってきた。時にはクラウ



ンも連れてきた。増えていく記念写真はいつしか壁中に張られ、笑いの絶えない看護が続いた。

やがて、そんな治療の様子を聞きつけたマスコミが大挙して押し掛けるようになり、楠美は「コスプレ・ドクターとその患者」としてテレビの特集で取りあげられる。それを末永家の親戚一同は「一族の恥」と騒ぎ立て、渡良瀬医師とも激しく対立。そして楠美の癌はどんどん進行し、家族は在宅看護の大変さを実感せざるを得なくなる。



—— 在宅医療のひとつのあり方を描いた本作品、果たして、人はどのような人生の最期を迎えるのが幸せなのか。医療に笑いは必要なのか……。楠美の容体はいよいよ悪くなり、最期の時に向かいつつある。その最期の瞬間まで楠美に楽しい思い出を……と願いながら、渡良瀬は、家族たちは、自分たちの取るべき態度に決断を迫られる。

古城十忍はこれまでインタビューに基づいて再構成したセリフを俳優が客席に直接語りかける「ドキュメンタリー・シアター」を3 作品上演していますが、本作ではいわゆる会話劇で進行するストレートプレイに、この「ドキュメンタリー・シアター」の要素を採り入れ、新しいスタイルの現代演劇を目指しています。

今回の戯曲を書くにあたっては、取材のために山口県の周防大島町を訪れ、「おげんきクリニック」の岡原医師をはじめ、岡原医師に末期の在宅医療を託した家族、病院関係者にもインタビューを行っています。

また、岡原医師が大学病院等で行った講演会にも数回足を運び、そのたびに講演に訪れた人々からも話を聞き、戯曲に反映させています。

■観劇に寄せられた声～初演アンケートより

とても感動しました。患者さんの気持ち、支える家族の気持ち、本当にリアルに演出されていました。人は誰でも死んでしまいます。自分はどうやって最期をむかえるのか……全く想像もつきませんが、私も笑って「楽しかった、ありがとう」って逝けるといいなあって思います。機会があれば、医療現場の人たちに、一般市民の方々にも、見てもらいたいものです。 ●訪問看護師

今年1月に母を癌で亡くしました。2年近くの在宅看護と、後半は病院で過ごしましたが、本当に大変で、笑い等ほとんどありませんでした。こんな風に笑いの中で看護できたら理想ですね。いろいろ思い出し、自分が死を迎えたらどんな風に過ごしていきたいか考えながら観ていました。 ●女性

「1分1秒の延命よりも少しでも長く笑顔を与えたい」という内容のセリフがとても印象的でした。医療従事者と患者ではなく、人間対人間として接し、笑顔を分かち合うことは、とても大切であると感じました。 ●不明

たくさん笑えて、楽しい気持ちになりました。考えることもたくさんありそうです。人にもお勧めしたいです。大道具や小道具、照明、人物の入れ替わりもきれいでした。ストップモーションの使い方も印象的でした。 ●道化師

身近にあるのにあまり取り上げられないテーマに興味をもちました。暗いイメージの「死」を、こんなに明るく楽しく見ることができてとても良かったです。私の理想とする「死にかた」がこの芝居の中にありました。 ●不明

とても大切な、そして誰一人避けては通れない問題。けれども誰も何も言わない問題。しかもこの問題を舞台にあげるなど誰もしなかった今まで。笑いと涙のステージに喝采です!! ●派遣社員

私も笑う時間がたくさんある時を過ごしたいと思いました。残される家族が笑顔で死を受け入れられることは本当に難しいですが、今日の舞台でとても大切なことだとわかりました。素敵な時間をありがとうございます。 ●女性

私は医学部に在籍しております。

『どうして医者になりたいと思ったのか』という一番大切な「初心」に立ち返らせていただくことができました。心から感謝いたします。 ●医大生

医療従事者はもちろん、すべての人に見て頂きたいと思いました。死は最大の教育、人生の初めと終わりに立ち会う人は必ず何かを感じます。それがたとえ子供であっても。 ●開業医

誰にでも訪れる「死」についてこんなに考えさせられることはありませんでした。病院って？ 医者って？ 死ぬ事って？ ……たくさん考えました。これからも考えていくと思います。そんなきっかけをつくってくれた芝居です。 ●女性

生きる事の意味を本日ふたたび考えさせられました。理想ですが、皆が笑って最期を迎えられたらいいですね！！ ●女性

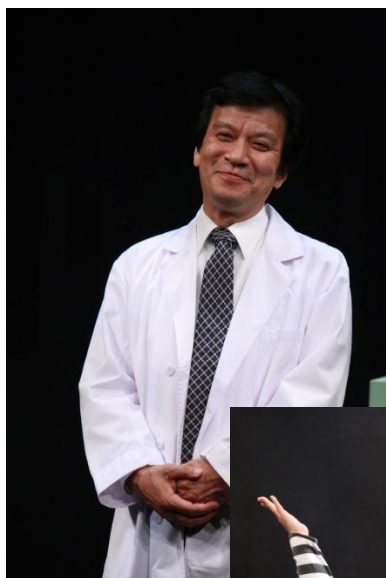
私の祖父母の事を考えながら公演を観ていました。昔から病気がちな祖母は一度死にかけた事があるのですが、その時は病院で治療してなんとか延命出来ました。恐らく、次は看取るでしょう。その時は明るく見送ってあげたいと思いました。素晴らしい公演でした。ありがとうございました。 ●会社員・男性

重いテーマのはずなのに、なぜかストンとストレートに胸に響きました。在宅医療の先生たちや、家族、そして何より楠美さんの気持ちが手に取るように分かり、ほんとに良い舞台だったと思います。いっぱい泣いてしまいました！
癌の話なのに、人が死ぬということなのに、観終わった後にあったかい気分になっていて不思議でした。 ●女性

■舞台写真 《シーン 01・02 大学病院》



《シーン 03 講演会》



《シーン 04・05 在宅看護》



《シーン 06・07 マスコミ・親族》



■アフタートーク再録

『死に顔ピース』ができるまで

□出演 岡原仁志(おげんきクリニック院長)×水戸部千希巳(女優・共同企画)×古城十忍

古城 今日岡原先生にも、本番を通して見ていただいたんですけど、どうでした？

岡原 いや、はっきりいってすごくよかったです。自分を見つめなおすいいきっかけになったというか……。やっぱり私たちは往診している時しか患者さんの思いや姿が見えないので。他の所が見れたというか……。自分を見つめなおす本当にいいきっかけで、結構泣いてしまいましたよ(笑)。

古城 今作品の始まりはですね、岡原先生は山口県の周防大島で開業医をなさっているんですけど、癌の患者さん、今日、水戸部さんがやったような40代の女性の方を看取られたんですね。そのことがフジテレビの夕方のニュースの特集で取り上げられていて、それを水戸部さんが見て、私もまたま見ていたんですけど、そのあたりのことを水戸部さんから……。

水戸部 はい。お話の通り、そのニュースを見ました。周防大島で開業医をしている先生が、終末期医療に携わっていて、ある癌患者の往診に行っていること。その家族の人たちの紹介……。

古城 その時も、ナース服姿で出ていらっしゃったんですよ(笑)。

水戸部 ピンクのね(笑)。その映像を見始めた時に、ピンクのナース服のお医者さんが出てきて「なんじゃこりゃ？」って思ったんですけど。クリニックの紹介もしていて『のんた』っていうマスコットがいるんですけど、それがクリニックの窓に貼ってあったり、あとロビーの所につくりものの大きな木が立っていて、そこに患者さんたちと撮った写真とかが貼ってあるんです。

「おもしろいなあ」思っていて……。それで、最後にその亡くなった女性のお母さんのインタビューがあって。亡くなった後にお母さんが、普通だったらきつと悲しみに暮れているんだと思うんです、でも「楽しい介護だったんですよ〜」って笑顔で仰ってて。亡くなった方には娘さんが二人いるんですけど、娘さんは、亡くなったお母さんの顔に綺麗に死に化粧して、笑顔でピースしてたんですよ。その写真見て「ええ〜！！？」ってものすごくびっくりして。母親を看取って笑顔でピースして写真に写れるって、どうやったらそんな風になれるんだろうって。お母さんにしても。すごい衝撃でしたね。「なんだこれ!？」って思って。それから、こんな風に楽しく見送ったり見送られる方法があるよ、っていうのを芝居にしたいなと強く思いました。それで芝居にするんだったら是非古城さんに書いていただき

たいなと考え始めて……すみませんこんな長く話して(笑)。

古城 いえいえ。まあ僕も見たんですけど、僕もまったく同じで、亡くなったお母さんの隣で娘さん二人が、ピースサインしてる写真にびっくりしましたね。それで、たまたま水戸部さんと会う機会があって、その時にこのニュースを見た話を聞いて、これをテーマに芝居をつくりたいねって話して。それから岡原先生と連絡をとりまして、趣旨をお伝えして、実際にご家族にもお会いして、少しずつ企画を進めていきました。

岡原 実は今回、私もびっくりしました。お母さんが「楽しかった」ってカメラに向かってインタビューされている姿を映像で初めて見たんです。

古城 そうなんですか！？

岡原 はい。娘さんを看取った後に「楽しかった」と言える、「人の死」というものが「楽しい思い出」として残るっていうことが、ありなんだなあって今回感じました。

古城 実際に僕も水戸部さんと周防大島に取材に行った時に、モデルになったご家族、お父さんとお母さんにお会いしたんですけど、お二人ともとても気さくな方で、取材でお話を聞かせていただいて、本当に「楽しかった」と仰っていました。実際に話を聞いて、本当にそういう気持ちになれるんだ、と感動しました。

(中略)

岡原 今回、私が今まで見えてなかった世界……在宅介護をするようになってかなり見ているんだろうな思いつつも、お芝居を見させていただいて、もっともっと奥の深い、もっともっと私たちが見てない世界があるんだと。その一端を見せていただきまして、本当に勉強になりました。このお芝居をできれば日本中の人に見ていただいて、自分の死を迎えるということに、いろんな可能性やデザインするということを感じていただければなど。絶対にみんな最期はくる訳ですから。

私は今『死』というものをこう考えています。

『死』とは『肉体という着物』を脱ぎます。そして死を迎えるにあたって人の『心』は、家族や友人の心の中に、『心の穴』として残っていきます。そして『魂』は次の世界に行って、また『次の魂』で必ず活躍できたり、家族の方の所へ行きますので。そんな形で『死』にしがみつかなくて、『死』をデザインしていただいいて。うまくいかなかったら『次の魂』の時にやり直せばいいと。そのように考えています。

『死をデザインする』というのは裏を返せば『どうやって生きていくか』ということです。今日皆さんはすごくいいきっかけをご覧になったと思います。

□2011年11月19日の終演後に開催

■CAST

- 【在宅緩和医療】 渡良瀬益造……………奥村洋治
桐野貴子……………関谷美香子
トゥーマー……………YAMA
- 【末永家】 母・末永楠美……………水戸部千希己
祖父・末永隆文……………藤村忠雄
祖母・末永照子……………山下夕佳
長女・末永希美……………瀬山英里子
次女・末永沙織……………
- 【大学病院の医師】 浅沼……………藤 敏也
坪倉……………越智哲也
一橋……………日暮一成
荒井……………谷本健志
洪沢……………関谷美香子
安達……………YAMA
牧教授……………藤村忠生
- 【看護師】 田所……………山下夕佳
鮫島……………関谷美香子
青木……………瀬山英里子
三田村……………越智哲也
野沢……………加島博美
若い看護師……………瀬山英里子
- 【テレビ取材クルー】 ディレクター・滝沼……………藤 敏也
カメラマン・三倉……………越智哲也
AD・土井……………谷本健志
レポーター・高橋……………日暮一成
- 【親族】 隆文の姉・加寿子……………加島博美
隆文の弟・朝雄……………藤 敏也
照子の妹・公子……………増田 和
公子の夫・洋平……………YAMA
- 【その他】 サイトウ……………加島博美
校長先生……………藤 敏也
児童…YAMA・日暮一成・谷本健志・加島博美・増田 和

■STAFF

作・演出	古城十忍
美術	磯田ヒロシ
照明	磯野真也（アイズ）
音響	黒澤靖博
衣裳	高木 渚
舞台監督	尾崎 裕（バックステージ）
制作	藤川けい子
企画・製作	（株）オフィス ワン・ツー

■プロフィール

古城十忍

こじょう・としのぶ／劇作家・演出家、「ワンツーワークス」主宰。宮崎県生まれ。熊本大学法文学部卒。熊本日日新聞記者を経て1986年、劇団一跡二跳を旗揚げ。以降、さまざまな社会問題をジャーナリスティックな視点で描く。2005年、文化庁新進芸術家派遣でロンドンおよびダンディ（スコットランド）に留学。帰国後、インタビューに基づく膨大な証言から戯曲を構成する「ドキュメンタリー・シアター」の上演にも力を注ぐ。08年、自然災害の脅威に対して危機意識の低い日本人の実態を描いた『流れる庭—あるいは方舟—』で一跡二跳を解散。翌09年に「ワンツーワークス」を始動。現在、社団法人日本劇団協議会常務理事、新国立劇場演劇研修所講師。なお、個人ブログ『古い日記』を日々、更新中。

岡原仁志

おかはら・ひとし／山口県生まれ。順天堂大医学部卒。外科医。「おげんきクリニック」（山口県大島郡周防大島町）院長。1995年より在宅医療を開始。その後、ホスピス研修、地域医療研修などを経て、2004年4月に「おげんきクリニック」を開設。夢は「思いやりの医療」をつくりあげ、日本中に広げること。自称、パッチ・アダムスの弟子。サッカーが大好きで、日本代表を熱烈に応援している。

劇団ワンツーワークス

OneTwo-Works／劇作家・演出家の古城十忍を代表とする演劇集団。元劇団一跡二跳の俳優を主力メンバーに、2009年に活動をスタート。数々の社会問題をジャーナリスティックな視点で描く古城十忍の新作書き下ろしオリジナル作品を中心に、現代社会にコミットする作品を次々に発表。2010年4月の旗揚げ公演『死ぬのは私ではない』では、死刑制度の是非を問い、2011年1月の『蠅の王』ではウィリアム・ゴールディングの小説を大胆に翻案し、パワハラを通して人間の闘争本能の本質を描いた。このほか、「自殺」をテーマに50人以上にも及ぶ人々にインタビューし、その証言を再構成して舞台化した日本初のドキュメンタリー・シアター『誰も見たことのない場所』は栃木県や宮崎県など各地方自治体と共催で再演を重ねている。また、劇団主催で「演技ワークショップ」を定期的に行い、若手俳優の育成にも積極的に取り組んでいる。

●上演についてのお問い合わせ

(株)オフィスワン・ツー／劇団ワンツーワークス

166-0004 杉並区阿佐谷南1-8-3佐保会東京会館101号

Tel 03-5929-9130 Fax 03-5929-9131

担当／藤川けい子 080-5021-5362

www.onetwo-works.jp